

説 林

高麗穆宗朝の禍亂

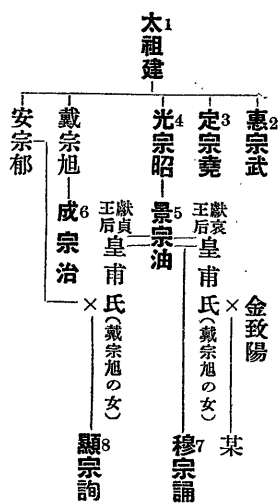
池 内 宏

高麗六代の主成宗は十七年間在位せり（宋太平興國七年——至道三年）。成宗に姪あり、誦といひ、前王景宗の子なり。成宗の襲位は景宗の意に出て、それは當時誦が二歳の嬰兒なりしが爲めなりしが、誦既に長じ、成宗には子なかりしかば、其繼嗣として開寧君に封ぜられたり（成宗九年）。遂に成宗の薨ずるに臨み、内禪を受けて位に即く。穆宗是れなり。

初め景宗に四妃あり、新羅の敬順王の女金氏を除

高麗穆宗朝の禍亂

けば、他の三妃は皆な太祖の孫女にして、景宗に於ては從妹たり。就中獻哀王后と獻貞王后とは、共に太祖の第七子旭の女、外家の姓を冒して皇甫氏といへり。而して穆宗は獻哀王后の出なりき。同姓相娶らざるは儒教の命ずる人倫の要義なるに、半島古來の習俗たりし近親間の婚嫁は、儒教の感化に依りて容易く改まらず。體初に於ける一二の例を擧ぐれば、太祖の一女は異腹の一子昭（光宗）に適し、惠宗は故あつて其の女を異母弟昭（光宗）に配し、（史林第二卷第二號所載拙稿「高麗太祖の薨後に於ける王位繼承上の悲劇」参照）、成宗は光宗の女にして從姉の關係ある劉氏（文德王后）を納れ、光宗の一女は王の同母弟貞（文元大王）の一子（千秋殿君）



に嫁したり。されば景宗が叔父旭の二女を納れて妃となし、當時の習俗として之を怪しむを須むべれども、斯くの如く倫常に對する觀念の低級なる一般的傾向の下に、二妃はまた後年私通の罪を犯して各一子を生み、穆宗の治世を汚せる禍亂の因をなせり。

禍亂といふは權臣金致陽の企てたる陰謀及び西京都巡檢使康兆の行ひたる廢立是れなり。事變の顛末を考ふべき關係材料は高麗史の世家及び列傳にして、即ち左の如し。括弧内の數字は讀者の參照に便せむが爲めに、國書刊行會本高麗史に據りて諸傳の

冊數及び頁數を示せるものなり。

后妃傳、獻貞王后皇甫氏(三三五)

宗室傳、安宗郁(三三〇)

獻哀王太后皇甫氏(三三四)

顯宗世家

金致陽傳(三三九七)

穆宗世家

崔沆傳(三七三)

蔡忠順傳(三七四)

皇甫僉義傳(三八二)

庚行簡傳(三三二八)

康兆傳(三三九八)

景宗薨じて成宗位に在り、獻貞王后は出で、王輪寺太祖の創建、松岳山麓にありの南の私第に居る。太祖の第八子郁は王后の叔父して、其の第亦た相近し。因つて與に往來し、王后、遂に娠めり。成宗十一年、たま／＼彌月に方りて事覺はる。郁は成宗の叔父なりしも、

成宗之を宥るさず、大義を犯せりとて、泗水縣慶尙南道

川に流せり。而して王后は慚恨の餘、自ら免身して

卒せしかば、傳姆を擇びて其の兒を養はしむ。兒は

即ち詢後宗顯宗なり。後、年を踰えて姆に抱かれたるを

召見し、深く之を憐み、泗水に送りて父と共に居ら

しめしが、十五年七月、郁、貶所に卒せしかば、明

年二月京に還らしめたり（后妃傳、宗室傳）

是の歲十月、成宗薨して、穆宗立つ。王の生母ば上

にいへる獻哀太后なり。王、歲已に十八なりしも、太

后千秋殿に居りて政を攝す。是れより先き、太后の

外族に金致陽といふ者あり、性姦巧、詐りて祝髪し

て千秋宮に出入し、頗る醜聲ありしかば、成宗、致

陽を遠地に配せり。然るに穆宗位を嗣ぐに及び、彼

れは召されて閤門通事舍人となり、數年ならずして

右僕射兼三司事に遷り、百官の與奪皆な其の手に出

で、權威中外を傾けたり。こは固より太后の然らし

めたる所、而して致陽は豪奢を極め、日夜太后と嬉

戲して憚らざりしが、穆宗の優柔なる、常に之を黜

くるを欲しながら、母の志を傷くるを恐れて敢てせ

ざりき。王の六年、太后遂に子を生み、其の子を以て

王の嗣となさむと欲す。時に王には未だ子なく、太

祖の諸孫は多く歿して、獨り存するものは詢のみな

れば、太后は忽ち詢を忌めり。生れて母を識らず、

今は父さへなし。慈悲の涙を沃がむものは、母の姉

なる太后なるに、太后は詢を忌めり。撫づべき黒髮

を強ひて剃らしめ、都内の崇教寺穆宗三年建立に置く。數

年の後（穆宗九年）更に三角山今の京城の北にありの神穴寺に

移し、しばらく人を遣はして謀害せしめむとしたる

が、詢は寺僧の庇護に依りて免るゝを得たり（皇妃傳、金致陽傳、顯宗世家）

傳、顯宗世家。

さて十二年（宋大中祥符三年、契丹統和二十八年）

正月に至り、突然奇怪なる事變は起れり。月の十六

日、王、祥政殿に御して觀燈す。忽ち大府の油庫より

火出で、千秋殿に延焼せり。千秋殿は太后の居る

ものなりしか。

處なり。王、殿宇府庫の煨燼となれるを見、悲嘆疾を成し、政を聽かず。近侍の諸臣、二三の宰樞及び親從の武官皆な内に直宿す。劉忠正、庾行簡の如き嬖倖、信任厚き崔沆・蔡忠順等其の中にあり。諸宮門を閉して戒嚴し、たと二門を開くのみ。仍つて敎命道場を殿中に設け道場は新講を行ふをいふ。王は累日中に居りて群臣を見るを厭へり。宰臣震怒し、寢に入つて疾を問ふを請へども許るされず。而して王は蔡忠順及び崔沆と嗣を立つるを密議し、皇甫僉義を遣はして詢を神穴寺に迎へしめたり。以上は穆宗世家に記るされたる事實にして、觀燈の當日に於ける火災の後、王の病中、管ならぬ事變の突發したりしを知るべし。而して崔沆傳に「王寢疾、金致陽謀不軌沆與蔡忠順等定策迎立顯宗詢」とあるを以て觀れば、倚重の臣のみ王宮の外を嚴守し、俄かに嗣を立つべく詢を迎ふるに至りしは、金致陽の企てたる陰謀を防止するにありしなるべし。然らば其の陰謀は如何なる

(一) 穆宗世家に「壬申、御許政殿觀燈」とあり。壬申は正月十六日なり。時日の上より之を見るに、觀燈は此の日宮中にて行はれし燃燈會に臨める謂なるべし。燃燈會は高麗開國以來の年中行事の一にて、其の時日につきては、禮志に「顯宗元年閏二月、復燃燈會、國俗、自王宮・國都、以及鄉邑、以正月望燃燈。二夜、成宗以煩擾不經罷之、至是復之」と見ゆればなり。然かも燃燈會の復行が顯宗元年なりしは、顯宗世家に之に關する明文の存するに依りても疑なければ、其の前年なる穆宗十二年の所謂觀燈を燃燈會と解するは、此の復行の事實に抵觸するが如し。燃燈と共に八關會も亦た國初以來の盛典にて、民力を費やすこと甚しかりしが（崔承老傳に載せたる承老の上書參照）、成宗位に即ぐに及び、兩京の八關會を停廢せり。然るにそが顯宗元年に至りて復行せられしことは、世家に「十一月庚寅、復八關會、王御威鳳樓觀樂」と見ゆ。たゞ成宗が燃燈會を罷めたることは成宗世家に明文なけれど、こは記載の脱漏にて、上文禮志の傳ふる如く實際停廢せられしなるべく、即ち顯宗世家に八關會と相並びて復行の記事の存する所以なるべし。然らば穆宗朝

の「觀燈」は如何にといふに、佛寺の建立はひとり成宗の時にはなかりしに、穆宗の襲位と共に復た始まり、二年眞觀寺を作りて太后の順利となし、三年、崇教寺を創め、十年眞觀寺の九層塔を營めり。即ち成宗の墓法に由りて佛法酷信の風は再び作り、遂に顯宗元年二會の復行を見るに至りしことなれば、宮中に於ける小規模の燃燈は、穆宗の時既に行はれつゝありしなるべし。所謂「觀燈」は是れならむ。顯宗二年正月、王、丹兵を避けて南幸し、正月燃燈會を行ふ能はざりしかば、翌月十五日（己未）還京の途上に於て清州の行宮に之を設け、爾來二月望を以てするを例とせり。國難の際なほ斯くの如し。王の復行が宮中のみの小規模のものならざりしを推すべきなり。

詢を迎ふるに至りし事情は、詳かに蔡忠順傳に見ゆ。即ち王と忠順との對話を掲げて曰く。王疾に寢す。忠順、崔沆等と與に内に直宿す。一日、王、忠順を臥内に召し、左右を避けて語つて曰く、「寡人疾漸く平かならむとす。聞く、外間窺視する者あり。卿、之を知るか」。忠順對へて曰く、「臣之を試み聞き

たれども、未だ實を得ざりき」。王枕上の封書を取つて與ふ、乃ち嬖人劉忠正の上書なり。云く「右僕射金致陽、覬覦非望、遣人致遺、深布腹心、仍求内援、臣曉譬拒之、不敢不奏」と。王又た一封の書を取つて與ふ、乃ち大良院君詢の上れるものなり。云く、「姦黨遣人圍逼遺酒食、臣疑毒不食、與烏雀、烏雀斃、謀危若此、願聖上憐救」と。忠順讀み畢つて奏して曰く、「勢急なり、早く圖らざるべからず」。王曰く、「朕疾漸く危篤、朝夕地に入らむ」○上文「寡人疾漸就平」とあるに矛盾す。恐らくは所傳の誤。今々太祖の孫、たゞ大良院君在るのみ。卿と崔沆と、素と忠義を懷く。宜しく心を盡して匡扶し、社稷をして異姓に屬せざらしめよ」と。忠順乃ち沆等と議し、皇甫俞義を遣はして詢を迎へしめむとす。王、忠順に命じて詢に與ふる書を草せしめ、俞義に授けて神穴寺に往かしめたり。

蔡忠順傳に見えたる所は斯くの如くにして、金致陽が密かに賄して劉忠正を誘ひ、恐らく王を弑せし

め、以て非望を遂げむとしたるを知るべし。非望といふは他にあらず、太后と通じて生みたる子の今は七歳なるを立てむとしたるものならざるべからず。

然るに忠正は之に與みせざりしのみならず、王の疾に寢せし時、上書して變を告げしかば、乃ち上述の如く王は俄かに戒嚴し、群臣の寢に入つて疾を問はむとするを許さず、而して密かに繼嗣の問題を議せしなり。然らば觀燈の日大府の油庫災ありて千秋殿に延焼じ、王の之を見て悲嘆疾を成せりといふは如何。こは致陽の陰謀と相關する所なきか。王の性は、史に「沈毅、少有人君之度」と記るされたれども、其の困厄の間に處したる態度より察するに、寧ろ頗る優柔にして氣力に乏しかりしが如ければ、殿宇府庫の煨燼となれるを見て疾を獲たるは、悲嘆、否な恐怖の結果なるべし。然かも後日王の摧沈に語りし言に「頃府庫災而變起、所忽皆由予不德、夫復何怨」といひ、「變」は即ち致陽の陰謀を指したるも

のなるべければ、觀燈の日大府の油庫より火を發せしは、必ず偶然の出來事にはあらず。蓋し致陽は特に此の日を擇びて火を府庫に放たしめ、以て宮中を騒がし、豫め腹心を布ける劉忠正を估みて大事を決行せむとしたりしなるべく、若し忠正の内應したらむには、事は必ず成りしならむに、彼れは手を下さずして、其の計畫を齟齬せしめ、やがて之を王に奏せしなるべし。

金致陽傳に「乘王寢疾欲變劉忠正上書告變」とあれども、こは王の疾に寢せし時陰謀の露見したるに由來したる所傳誤のなり。康兆傳に「穆宗寢疾知金致陽謀變」とあるを正しとすべし。

論じて是に至り、更に考察を要する問題は、致陽の陰謀と太后との關係是れなり。後の傳に、上述の如く詢を神穴寺に移し、后がしばしば人を遣はして謀害せしめむとしたりといひ、次に「一日使内人遣以酒餅皆和毒藥、内人到寺求見小君、欲親勸

食寺有僧輒匿小君於地穴中、給之曰、小君出遊山中、安知去處耶、及內人還散之庭中、烏雀食而即斃」と見ゆ。上文王と忠順との對話の中に見えたる詢の上書は、正に此の事實に應ずるものなれば、致陽の大逆を企てたる時、亦た太后の人を神穴寺に遣はして詢を毒殺せしめむとしたるは疑なし。又た太后の傳に曰く、「十二年正月、千秋殿災、太后入長生殿」と。こは府庫の災の太后の殿に及びし時自ら避難したる謂なれば、太后は放火の企には關らざりしが如し。若し豫め致陽と共謀したらむには、故ら此の殿に在るべくもあらざればなり。按ずるに太后は致陽に私して子を生み、之を穆宗の嗣となすべく詢を忌みしも、穆宗は亦た後の實子にして、其の親子の情の厚かりしは、後日康兆の逆亂に遇ひ、相携へて南幸せし時、太后食せむとすれば、王親ら盤盂を奉じ、太后馬に御せむとすれば、王親ら轡を執れりといふに、よりても明かなれば、太后は穆宗に嗣なきを以て彼

の一子之を之に充てむとこそしたれ。此の子の爲めに穆宗の位を奪はむとはせざりしなるべし。況んや危害を穆宗に加へむとするが如きは、斷じてあるべからず。斯く太后が府庫の災には關らずして、たゞ殆んど同時に詢を毒殺せむとしたりとせば、そは亦た致陽の姦謀に出でたるものならざるべからず。蓋し致陽は太后の生みたる我が子を立つるが爲めに大逆を企て、同時に太后をして詢を殺さしめむとしたりしなるべく、即ち之を以て彼れの陰謀の全體なりとすべし。

陰謀の發覺せし時、皇甫僉義をして詢を迎へしめたる穆宗の意志は、其の蔡忠順に語りし言に「予欲親禪、可亟遣、不可緩也、若疾瘳、如成宗封朕故事、○成宗九年、王、穆宗を開寧君に封じて嗣となす早定名分、則無窺伺之人矣、朕無子、而繼嗣未定、衆心搖動、是吾過也、宗社大計、無過於此、卿等其各盡心」といひ、又た詢に與へし書に「自古國家大事、素定於前、則人心乃安、今予寢疾

姦邪窺覷、以寡人不豫爲之所、名分未定、故爾、卿太祖嫡孫、宜速上道、寡人未至、大期得面付宗社、沒無遺恨、若有餘齡、則使處東宮、以定群心」といへる如し（蔡忠順傳）。久しく詢を太后の忌むにまかし、王は、今や機かに醒めて之を繼嗣となさむとしたりしなり。されども王は未だ逆臣致陽の罪を問はず、たゞ彼れをして自ら爲す所を知らざらしめしのみ。傳に「王召蔡忠順密議、令亟迎大良君致陽知之、無如之何、首鼠數日」とあるは即ち其れなり。こは優柔なる王として其の太后との關係を顧慮して手を下すに由なかりしならむも、斯くの如くにして姦邪の窺覷を察ぎ、且つ所謂群心を定めむとするは、殆んど事體を辨へざるものといはざるべからず。忽ち叛臣康兆を起たしめ、此の不徹底なる状態が禍亂縱横の間に其の結歸する所を見出だし、は、蓋し當然の成行なりしなり。

金致陽の陰謀が府庫の炎上のみに終りし後十六

日、二月三日に至りて西北面都巡檢使康兆、詢を迎立し、穆宗を廢し、致陽父子を殺し、並に其の黨及び太后の親屬を流せり。而し、彼れは遂に穆宗を弑せり。穆宗自ら決する能はざりし問題は、是に至りて落著したるが、吾人の特に知らむと欲する所は其の間の事情にして、之に關する記事は康兆傳にあり。然かも之を一讀し、文字の表面に現はれたる所のみを以て、康兆の西京より至り遂に廢立を斷行したる事情を充分に會得せむとすれば、頗る要領を得ざるの憾あり。従つて康兆傳に記るされたる事實の説明は、やがて吾人の命題の解釋たるべし。

初め穆宗の詢を迎へむとするや、事は極めて秘密に議せられ、其の議に與かれるは倚重の宰臣蔡忠順・崔沆及び寵人劉忠正等のみ。庾行簡亦嬖倖の一人なりしも、詢の迎へらるゝを欲せざる故を以て、王は事の泄るゝを虞れ、忠順を戒めて之を行簡に告げざらしめたり（蔡忠順傳）。而して皇甫俞義を神穴寺に遣はす

と共に、康兆を西京より徴したることは、康兆傳に「穆宗獲疾、知金致陽謀變、遣皇甫俞義往迎顯宗、又知殿中監李周禎附致陽權授西北面都巡檢副使、即日發遣仍徵兆入衛、兆聞命、行至洞州○瑞興の西
南二十里、龍川驛、蔡忠順等に示すに先ち内に直宿せしめしもの、一人にて（穆宗）、太後の親屬なり（康兆）。其の致陽に附せりといふは如何なることか詳かならねど、少なくともさる疑ありきとせば、詢を迎ふことは固より彼れにも秘せられしなるべし。而して之を康兆の許に送るに當り、使者となさず、特に都巡檢副使を權授せしこと亦た注意すべく、これも秘密の漏洩を防ぐが爲めにて、即ち詢を迎ふるに、軍校の數多ければ行くこと遅く、姦黨（致陽）の先づ圖る所とならむも知るべからずとて、たゞ皇甫俞義等十餘人を遣はし、と同様なる用意なりしなるべし（蔡忠順傳、皇甫俞義傳）。又た兆を徴して入衛せしめし故は、詢の入京を迎ふる

際、姦黨に對して備へむとするにありしが如し。俞義を發遣する時、又た開城府參軍に命じ、卒一百を領して郊迎せしめむとしたりといふを以て、爾か推せらる（皇甫俞義傳）。然かも事は斯くの如く秘せられたれ命のまゝに龍川驛まで來りしなるべし。然るに彼れは進んで京に向はず、踵を回して本營に還れり。即ち傳に「內史主書魏從正、安北都護掌書記崔昌會坐事被黜、深怨朝廷、常欲構亂、二人俱謁兆、結言、主上疾篤、命在頃刻、太后與致陽謀奪社稷、以公在外、手握重兵、恐或不從、矯命○穆宗徵召足下、當速還、本道大舉義兵、保國全身、時不可失、兆深然之、以爲王已薨、朝廷悉被致陽誑誤、便歸本營」と見ゆ。太後の傳に據るに、しばしば詢を謀害せむとしたる后は、亦た尤も忠臣義士を忌憚し、多く之を罪に陥れ、穆宗は禁ずる能はざりきといへば、魏從正・崔昌も或る微罪によりて太后若くは致陽に黜けられたるものな

るべく、今や彼等は外間に漏れたる事實を以て兆の召されし事情を揣摩し、之を姦黨の所爲として兆の舉兵を促しなり。されども兆は未だ姦黨を討つべき命に接せざるが故に、便ち西京の本營に歸り、暫く形勢を觀望したりしなるべし。斯かる間に穆宗の兆を召したることは姦黨の知る所となれり。傳に「太后忌兆來遣內臣守岳嶺」○黃州と瑞興との境をなせる險要、一名慈悲嶺、使過行人」といひ、太后の此の處置は致陽の計に出て

たるものなるべし。又た傳に此の句を承けて曰く、

「兆父患之爲書納竹杖中令奴剃髮爲僧詭言妙香山僧報兆云王已賓天姦兒用事可舉兵來以靖國難」奴晝夜急走至兆處氣竭而斃兆探得社書愈信王薨遂與副使吏部侍郎李鉉雲等領甲卒五千至平州○平山と。致陽の陰謀の發覺せし後、王はひたすら戒嚴して宰臣を召見せず、其の疾を問ふを許さざりしかば、疑惑は從つて生じ、外間或は王の薨去を傳へしならむが、其の風説は疑なき事實として兆の父

より彼れに致され、彼れは遂に自ら姦兒を討つべく起ちたるなり。然るに兆は京北平州に來りて王の未だ薨ぜざるを知れり。兆、氣を喪ひ、頭を垂るゝこと良し久しかりしが、今は己むべからずとなし、遂に意を廢立に決す。立てむと欲するものは固より詢なり。たゞ王の已に詢を迎へしことを知らざりしかば、分司監察^{西京}金應仁を遣はし、兵を率ゐて往き迎へしめたり。

康兆の廢立を決せし事情は斯くの如し。要するに穆宗は金致陽の兇逆を認めながら、之を誅する意なく、其の兆を召しゝも、詢の入京を迎へしめむが爲めなりき。召されし兆は、上京の途上に於て其の召命の或は姦兒の計に出てたるものなるべきを聞知し、一たび踵を回しゝが、やがて王の薨去に關する謠傳を信ずるに及び、忽ち兵を率ゐて上道せり。こは他なし、自ら姦黨を芟除し、之に代つて政權を掌握せむとしたるものならずんばあらず。さもあれ王

の薨逝の若し實事なりしならむには、彼れは乃ち天に代りて奸を除き、新主を擁立し、盡忠靖難の美名を負ふべかりしなり。然るに事は豫想に反し、王尙ほ在らずと知られしかば、其の命なくして擅に兵を興し、罪は、到底拭ふべからざるに至りぬ。座して罪を受くべきか、進んで廢立を敢てすべきか、即ち彼れが頭を垂ること良しかりし所以にして、彼れの平州に於けるは、正にルビコンの渡頭に立ちたるものなりしなり。然らば遂に骰子を投ぜし彼れは、如何にして廢位を行はむとしたりしか。穆宗世家に曰く「王……善射御嗜酒好獵不留意政事信狎嬖倖以及於禍」と。而して庾行簡傳に據れば、行簡、姿美麗、穆宗之を嬖愛して龍陽の寵あり、宣旨を下す毎に、必ず先づ行簡に問ひて然る後行ふ。彼れ龍を怙みて驕蹇、百僚を輕蔑して頤指氣使し、近侍の彼れを視ること王の如くなりきといふ。されば王を廢せむとしたる兆は、金應仁を神穴

寺に遣はすと共に、先づ王に奏して曰く、「上疾彌留、國本未定、姦黨窺覷、又偏信庾行簡等譏諛、賞罰不明、致此危亂、今欲定分以係人心、除惡以快衆憤、已迎大良君、詣闕恐聖情驚動、請出御龍興歸法寺、寺共二に都内にあり即掃盪姦黨然後迎入」と。其の出御を請へるは、詢の來るを待ちて廢位を行はむが爲めにして、固より迎入するの意ありしにはあらざるなり。

さて康兆傳は兆が出御を奏請したる記事を受けて「是日、應仁與○愈義到神穴寺、奉顯宗○遣」といひ、

次に翌日の事件として、兆の兵士の宮中に闖入せしこと、穆宗の、太后及び蔡忠順、劉忠正等と共に法王寺に出御せしこと、俄かにして皇甫愈義等詢を奉じて至り、遂に廢立の行はれしこと等を記せり。「是日」云々は、翌日愈義等の詢を奉じて至れりといふに對して、重複の嫌ひあるが如くなれども、神穴寺の存する三角山今の京城と開京とは約十六邦里を隔る府の北山

て、一日程としては遠きに過ぐるを以て推するに、所謂「奉顯宗還」は、兆の遣はしたる金應仁及び穆宗の使臣なる俞義が、廢立の決行せられし前日神穴寺を發して都に向へる謂なるべし。而して穆宗世家に「二月戊子^甲、請王出御龍興歸法寺己丑^甲、^乙兆兵闖入宮門王知不免與太后號泣出御法王寺俄而俞義等奉院君^丙而至遂即位兆廢王爲讓國公」とあれば、詢の神穴寺を發せしは二月二日ならざるべからず。又た穆宗世家は日子を闕きたる「西京都巡檢使康兆領甲卒而至遂謀廢立」なる記事を二月の末に擧げたれども、こは恐らく誤にて、兆の入京と其の穆宗に出御を逼れるとは、同日、即ち二月二日なりしなるべく、而して平州と開京とは相距る遠からざれば、平州にて廢立の意を決せし兆が金應仁を神穴寺に遣はし、其の前日なりしならむと察せらる。然らば俞義の同寺に使用したる時日は如何といふに、穆宗世家は府庫の災ありて後、王

の病中致陽の陰謀の露見し、密議の結果俞義を發遣するに至りしまでの經過を、正月壬申（十六日）に繫けて叙せるが、斯く様々なる事件が同日中に起らざりしは殆んど疑を容れざれば、俞義は正月十六日後若干日を隔てし某日神穴寺に向へりとすべし。而して同時に召されし兆は、半途入京を中止し、やがて乃父の密書を得るに及び、遂に意を決して平州に至れり。其の間亦た若干の日數を隔てしこと甚だ明かにて、俞義と應仁とは同時に神穴寺に至りしには非ず。然るに上記の如く二月三日彼等が相共に詢を迎へて還りしは何ぞや。皇甫俞義傳に曰く、「俞義等至寺僧疑爲姦黨所遣匿不出俞義等具道所以迎立之意遂奉以還」と。されども寺僧の容易く詢を出ださざりしは、單に俞義を疑ひて姦黨の使者となし、が爲めのみにはあらざらむ。俞義は穆宗の書を奉じて來りしも、穆宗は、太后と共に詢を毒殺せむとし、且つは私かに大事をさへ企てたる致陽を誅せ

ざるを以て、其の命に従ふことは、詢并に寺僧の尤も危険視したる所なるべければなり。然るに若干日の後、致陽を誅して廢立を敢てせむとする兆の使者應仁は來りぬ。詢は是に至りて始めて應仁及び兪義と共に神穴寺を發せしなるべし。

出御を逼られたる王は翌日なほ内にありしに、兆の兵士は闖入せり。陰謀露見以來常に殿門を守りし卓思政、河拱辰等は忽ち兆に奔り、王は太后と共に出御したれば、兆は容易く廢立を行ふを得たり。而して兆は又た兵を遣はして致陽父子及び庾行簡等七人を殺し、其の黨及び太后の親屬李周禎等三十餘人を海島に流しぬ。要するに王の閑却したる重大問題の處分は、野心家なる兆によりて擅行せられ、自ら位をさへ失へるなり。然るに王は天を怨まず人を咎

めず、太后と共に都門を出て、忠州に向へり。時に兆は從臣崔沆を召還して職を供せしが、王は沆に告げて「頃府庫災、而變起、所忽皆由予不德、夫復何怨、但願歸老于鄉、卿可奏新君、且善輔佐」と言へりといふ。亦た以て王の好人物なりしを想見すべし。されども其の徒らに好人物なるは、却つて人心を繋ぐに足らず。廢位と共に新主に歸せしものは獨り沆のみにはあらずして、蔡忠順も皇甫兪義も皆な然りしなり。斯くの如くにして忠州に向へる王は殆ど殘軀を留むるに過ぎざりしも、兆としてはなほ自ら畏れざるを得ざりしなるべく、王の積城縣開京の東、今も同名にある時、人を遣はして弑せしめ、其の自刎したるを以て聞せり。太后は黃州に遙れ、此の後長く在世したりき。

(終)